



2025 年

1 月 第 1・2 週 の 主 日 礼 拝 説 教 要 約

・ 1 月 5 日 ルカ福音書 2 : 4 1 - 5 2 .

『 神童イエス 』

・ 1 月 1 2 日 マルコ福音書 1 : 1 - 1 1 .

『 ヨルダン川にて 』

衣笠病院教会 牧師 宮原晃一郎

《 神童イエス 》

共同体の諸々の義務や宗教上の義務が発生する成人（男性13歳、女性12歳）となる前年（12歳）の時のイエスにまつわる出来事が今日の場面です。ユダヤ人の慣習に従えばイエスには神殿詣での義務はまだありません。ただ、当時の親たちは成人前の子供であっても“慣らし”のために神殿詣でに同行させることが、よくありました。現代の常識に当て嵌めるなら、イエスはこの時19歳と同じ扱いを受けます。

平均寿命が30歳に満たない時代（1世紀）ですから、これに合わせて“成人”の時期も早かったと考えられます。親と死別する迄に“大人”となっていなければ、子供ばかりでは古代社会は成り立たなかったからです。したがって“少年イエス”なる聖書の見出しは、やや時代錯誤といわれても仕方がありません。

ベツレヘムの街外れの家畜小屋で生まれたイエスが、両親に抱かれて神殿詣でをした時にはイエスの本質を言い当てる預言者らがそこに待機しておりましたが、今回の神殿には、もうそれらしき人物は見当たりません。12歳のイエスは、誕生時とは違い、大人と語り合うこともできます。

さて、春の過越祭にイエスは両親に連れられて、ガリラヤのナザレを出てエルサレムへと向かいます。おそらく近隣の村人や親類と一緒にです。往復の道なりには道標もあり、一定の団体移動がなされたと考えられます。うまくいけば“群れ”から逸れることはなさそうです。

往路（上り）では別段、問題は発生しなかったようです。目的地はエルサレムです。その近郊に数日間滞在し、もといたナザレに戻る予定です。

時が経ち、過越祭が終わると、祭りに集まっていた多くの人々が、一斉に家路につきます。復路（下り）では再び往路と同じ団体移動が始まります。出発点（起点＝エルサレム）からの下りは一斉スタートとなる分、人の数は往路の数倍に膨れ上がります。ただ、それぞれの目的地は決まっているので、夜道さえ気をつければ心配はいりません。イエスが“所属”する団体もそのうちの一つです。往路と同じ道を“一日分”歩き終えたと、一行は宿泊予定地に辿り着きました。今度は朝まで家族単位の行動が待っています。と、その時、ヨセフとマリアには同行していたはずの息子イエ

スの姿が見当たりません。一体どこに消えたのか。疲労困憊の両親は取る物も取り敢えず、今来た道をひきかえすことになりました。夜通し歩いて、二人は“祭りの後”の静まり返ったエルサレムに舞い戻ります。

行方が分からなくなった“三日後”に息子は現れます。後に、死んで甦るイエスが要した日数よりも一日多くの時を経て。ただし、この日（四日目）は誰も喜びに溢れることはありませんでした。ヨセフとマリアは息子を前にして“怒り心頭”です。

どうして、こんなことをしてくれたの！ 見なさい！ お父さんも私も心配して（血眼になってあなたを）捜してたのよっ！

イエスはマリアから、こっぴどく叱られました。するとイエスは親に向かって返事をします。

どうして私を、お捜しになったのですか、私が自分の父の家にいるはずだということを、知らなかったのですか。

両親は息子の語ったことの「意味が分からなかった」とのことです。イエスが語った自分の“父の家”とは、言うまでもなく、父なる神の家であるエルサレム神殿のことでした。親はおそらく来年、成人するはずの息子の、こうした子供じみた（？）素行が気がかりだったようです。

その時、息子は神殿に居残り、境内で教師たちと差しで議論していたのです。この20年後に“教師”のうちの誰かが、イエスと敵対することがありませんように。

《 ヨルダン川にて 》

全ての預言者と律法が預言したのは、ヨハネの時までである。

（マタイ福音書 11：13）

律法と預言者は、ヨハネの時までである。

（ルカ福音書 16：16）

こうした、イエスの発言は、洗礼者ヨハネをもって、その“時”が終焉することをよく示しています。つまり、ヨハネの最後の大仕事は、ナザレのイエスに洗礼を授けることでした。その後、領主の倫理に悖る結婚を公然と非難した廉でヨハネは逮捕され処刑されてしまいます。こうして「律法と預言者の時」は終わりますが、ほぼ同時期にイエス・キリストの所謂、“公生涯”が、始まります。

「主の道を備え、道筋をまっすぐにする」ことがイザヤ書の説くヨハネの使命だったのだとすると、その“主の道”を整える使命のはじまりに彼による授洗も含まれていたのでしょうか。もし、そうだとすると、ナザレのイエスの“公生涯”と、これが深くかかわっていたと考えられます。

僻地ナザレの（自称）はした女のマリアから生まれ、30歳（ルカ福音書3：23）になって、罪人らと同列に並び、ヨルダン川でヨハネから洗礼を授かったイエスは、この時、その行為者（ヨハネ）の時代の終わりと共にありました。律法と預言者の時代は、こうして幕を閉じたのです。今後は律法も預言者も当てにすることはできなくなります。これは、古代社会の人の生き方そのものの大転換を意味します。

けれども、使徒言行録によると、イエスの直弟子たちは、この大転換を受け入れられず、異邦人との交流を、一部、遮断して、パウロから非難されます。パウロの存在理由もそこにありました。

さて、イエスによる大転換の“制定”は、当該民族の解体を意味していました。その、徹底をもって、ユダヤ教のキリスト派は独立したキリスト教となり、今日に至ります。

罪なきイエスが、どうして“悔い改めの洗礼”を受けたのか、という議論は、事実上棚上げとなったままです。ただ、イエスが洗い流したものは、もしかしたら“罪”ではなく、「律法と預言者」の影響そのものだったのかもしれない。